

旅行靴はいつもリユック  
サツク



早川  
博信

福井新聞の「北風南風」に連載された良質のエッセイ、  
自由な言葉がさわやかな風となって吹く

旅行鞆はいつもリユツクサツク



## はじめに

山に登る日の朝は早い。集合場所に集まってくる車のなかにはヘッドライトを付けて来るものもある。六、七人が乗れるミニバンの後ろに山靴、ザック、ピッケル、スノシューが積み込まれ、冗談が交わされ、日常の気分を駐車場に残し我々は出発する。世間の仕組みに取り込まれて動いている身体と精神はそのとき解放され、今日もきつと楽しいに違いないと、誰も決して口には出さないが、みんなの心はもう山の中を向いている。

空港で出国手続を終え搭乗のアナウンスを待っているときも同じような開放感がある。これから異なつた言語の国で聞き慣れない言葉を聞き、日頃は目にしないいろいろな表情を持った顔を見ることになるのだと、感慨にふけっているその時間はなにか明るくて軽い。それは私にとっていつも飛行機に乗り込む前の特別な時間である。

三十の短編からなる本書は、福井新聞の「北風南風」欄に二〇〇五年六月から二年九ヶ

月にわたり連載されたものに恩師である橋本芳契先生の思い出（これは「北風南風」欄が終了したので載ることがなかった）を加えてできたものである。タイトルは様々でひとつのテーマがあるようには見えないが、山と旅行と、それに仏教（の周辺）を巡る話になっている。

山は当然旅のひとつの形であるが、仏教の勉強も長い人生の長い旅の伴侶と言ってもいい。出会った人と語り合うことで二千数百年の伝統の言葉の真の意味を知ることになると思っている。「山は仲間と旅行は一人で」。すると「仏教はみんなと」ということになるだろうか。これら三つにはずっと関わってきたので、何か書こうと思って待っているとそこから伝えたいことが出てきた。一ヶ月に一度福井新聞小浜支社に原稿を送った。楽しい作業だった。

この短いエッセイが、ほんのしばらくであっても、世の中の憂さをちよつとだけ遠くにやる役目を果たすことが出来るなら、それはとてもうれしい。



# 目次

はじめに

十三名の外国人自転車旅行者 1

三角点クライマー 5

この夏、ウィーンとプラハとザルツブルグに（上）

この夏、ウィーンとプラハとザルツブルグに（下） 13 9

うどんとどんぶり 17

聴き合おう 21

何語で話しているの 25

山岳会の一年 29

ブツダガヤ 33

ターバンのインド人 37

映画館 41

一線を超えると 45

春の山で 49

クロアチア 53

- させていただきます 57  
知床で会った若い二人 61  
問う 65  
川 69  
空を飛ぶ 73  
ホワイトアウト 77  
大海を以て牛跡に内るることなかれ 81  
方丈の間で 85  
私は運転手でない 89  
槇谷（名田庄）の幻の滝 93  
世界陸上二〇〇七大阪 97  
移民、友人Sのこと（上） 101  
移民、友人Sのこと（下） 105  
ラッセル 109  
悲しみが消えるということ 113  
橋本芳契先生 117  
あとがき 122